

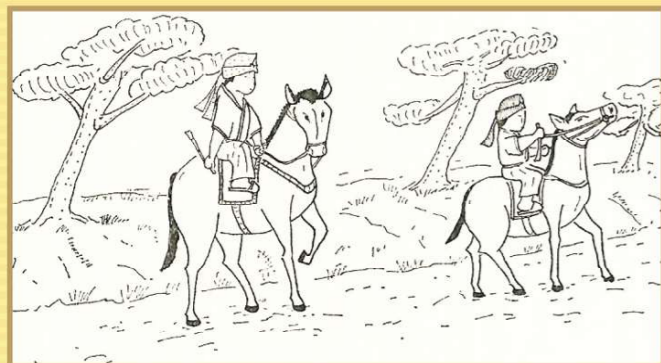
ウマ スー プ ジ ノ ン 馬勝負と宜野湾馬場

マーハラーセー・ンマジュリー
馬走らせ・馬揃いとも言われますが宜野湾では馬勝負と呼び、琉球王国時代から戦前まで行われました。沖縄の在来馬は小さくておとなしいので荷物の運搬や農耕に向いており、背中に乗せた積み荷を落とさないように運べることも必要な技術でした。そういった事から琉球競馬では速さよりも優雅さが競われました。

勝負は2頭ずつ行われました。右前脚と右後脚、左前脚と左後脚を交互に動かす“側対歩”という独特の走り方で、試合中に騎手の体が揺れないように走ります。そのリズムや馬の姿勢、人と馬との呼吸等、優雅さや美しさが競われました。中には一足とびに走ったり、方向をまちがえたり、横ばいや落馬もあり、笑いと拍手が起こりました。2頭の間隔が空くと審判が旗をあげて勝敗が決まります。馬勝負の賞品は普通手拭でしたが、大きな大会では賞金も出ました。

戦前、駿足の名馬といえば、大謝名のスビ(屋号・姓は天久)の持ち馬ヒコーキが有名ですが、宜野湾村には他にサバグチ・マーシラベ・マンガタミグワーなどの名馬がいました。

昭和初期まで馬場のあったところは、字宜野湾のみでした。中頭地域で名高い宜野湾馬場は宜野湾街道の近くにあり、そのコースは県内でも長い方で300mから400mほどだったそうです。馬の走るコースは古くは直線であったようですが、後世になって長方形の馬場を廻る競走になりました。



ウマスー プ

『宜野湾市史 第五巻 資料編 四 民俗』より転載

綱引きの復活



かつて旧暦6月15日あるいは25日に、宜野湾馬場で行われていた字宜野湾の綱引きは、日没後に一回勝負を行う。誰でも参加できる「諸人綱」で、綱を高く持ち上げたままカヌチ棒で貫く。勝利した側の綱を担ぎ上げ馬場を蛇行する「戻り綱」が特徴でした。

沖縄戦の混乱で途絶えましたが、2006(平成18)年3月、多くの区民が参加した創作市民劇「じのーん産泉」公演をきっかけに、復活の気運が高まり、準備に取り組みました。

翌年、真夏の日差しが照りつける中、区民総出で本綱作りが行われました。会場となる沖縄国際大学への通りには横断幕が掲げられ、各通里には看板や各班の「のぼり」が立ち並び、ムードを高めていきました。子ども会ではさまざまな形や彩りのチチンドゥール(鼓灯籠)が作られました。

綱引きは前村渠(雄綱)と後村渠(雌綱)に分かれて勝負します。当日は道ジュネーに始まり旗頭・ガーエー・メーモーイ、開会行事、綱引き、戻り綱、シュニンモーアシビ、カチャーシー等の全区民参加による伝統行事が続き、字宜野湾の綱引きを踏襲した「じのーん大綱引き」が復活しました。それからは5年毎に行われています。

編集・発行 / 宜野湾市教育委員会文化課

〒901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩 1-1-2
TEL.098-893-4430

編集協力 / 株式会社アートリンク

〒901-0146 沖縄県那覇市具志 3-17-22
TEL.098-894-5397

印刷 / □□□□□□□□□□

〒000-0000 沖縄県〇〇〇〇〇〇-00-00
TEL.000-000-0000

宜野湾 歴史文化遺産マップ

宜野湾について

宜野湾市の中央部、琉球石灰岩の台地上に位置し、石灰岩地帯の特徴である洞穴や湧泉が発達している地域です。

戦前までの宜野湾はジノンドゥームラ(宜野湾同村)とも呼ばれ、宜野湾並松に沿って、その東側に広がる大きな集落でした。1671年、間切新設の際に間切番所が設置され、沖縄県となってから戦前まで村役場や中頭役所・学校・郵便局などの公共施設が置かれ行政の中心でした。ナンマチに並行してウマイー(馬追=馬場)があり、そこではマチグワー(市場)が開かれ、にぎわいを見せ、普天間と並ぶ大きなマチでした。

戦後は集落を基地に接收されたため、人々は集落南の畑地である薄倉原を中心に前田原・山川原に宅地を造成し住まざるをえませんでした。基地内には後の御嶽や産泉などが残り、字宜野湾郷友会が結成され自治会とともに、旧暦3月3日のサングワチャーや旧暦7月のエイサー、舞方、旗頭演舞等の伝統行事を継承しています。2007(平成19)年には沖縄国際大学の運動場で66年ぶりに大綱引きが復活されました。

■ 戦前の字宜野湾集落イメージ図



■ 宜野湾市全域図

